

“しがじん”はみんなのねがいをつなげるために、全国障害者問題研究会（全障研）滋賀支部が発行しています。
障害のある人に関わる人たちみんなのつながりをつくり、ひろげていきたいというねがいから生まれました。

しがじん

2019. 11 No. 19
TAKE FREE !

全障研では、障害者や家族の願いを大切に、すべての人の発達を保障するため研究活動に主体的に参加しています。あなたもぜひ、全障研にご入会ください。
詳しくは、下記までお問い合わせください。

TOPICS 「もっと知りたい！みんなの実践」

子どもたちと日々過ごす中で「他の人はどんな風にかかわっているんだろう？」「園や学校ではどんな実践をしているんだろう？」と気になること、ありますよね。でも、自分とは違う立場の人たちの話を聞ける機会はなかなかありません。

今回は「みんなの実践報告」として就学前の現場と、養護学校小学部での実践を紹介します。そして9月に行われた学習会の報告から、中学校の支援学級、養護学校の中学部での実践を紹介しています。次号にも続いていく予定です。

今年度の「しがじん」のテーマの一つに「明日からの実践のちょっとした手助けになるもの」があります。子どもの見方や授業の作り方など、いろいろな立場の方の考え方を知って、学び合うことができたかな、と思います。

ご感想お待ちしております(^o^)!

* 学習会のお知らせ *

「自分らしく『働く』」

日時：12月15日（日）

13：10 受付開始

場所：アクティ近江八幡

共催：きょうされん滋賀



作業所や養護学校高等部、高等養護学校など、様々な立場から障害のある人が「働く」ことについて考えます。詳しくは後日配布されるポスターをご覧ください(^o^)

たくさんの方のご参加をお待ちしています。

全障研滋賀支部へのお問い合わせは

meshineruazuki@gmail.com（事務局 能勢ゆかり）まで

全障研滋賀支部



「みんな大好き バスあそび」

草津市立発達支援センター湖の子園は、障害や発達の遅れ、その疑いのあるお子さんやご家族に早期から発達支援を行う療育の場です。「うきうきわくわく みんなのえがお のびのびあそんで ころころつながるうみのこえん」という保育目標のもと、給食・午睡を含む週5日通園を実施しています。そんな湖の子園でのあそびは、子どもたちの「やってみたい!」「楽しそう!」を引き出していけるよう、子どもたちの大好きなものを手がかりにつくり出していきます。園には車や電車などの乗り物が大好きな子どもたちが多く、今回はそんな子どもたちに大人気の乗り物の教材をいくつか紹介します。

(1) お部屋の中でバスごっこ

室内用のバスに見立てた教材です。湖の子園では毎年9月にバス遠足がありますが、イメージを膨らませていくために、子どもたちの発達に合わせて、バスごっこやお弁当ごっこなどを取り入れています。おままごとコーナーでお弁当を作ったら、段ボールバスにのって出発!左の写真のバスは普段の遊び場面以外にも、絵本の時間などには集団から少し離れて遊んでいる子どもたちを迎えに行くような使い方も。バスに乗ってみんなの輪に到着すると、そのまま即席のイスに早変わり!右の写真は箱型の大型バスで、中に座席やチャイム、切符の回収箱もついています。初めはシンプルなバスでしたが、遊びを繰り返す中で子どもたちのイメージが膨らみ、保育者とのやり取りの中で徐々にバージョンアップしていきました。



(2) 廊下の移動もバスに乗って♪

大きな段ボールで作ってある、みんなが乗れるバスです。部屋から別の場所へ廊下を移動するときなどに大活躍!イメージのできる子どもは目的地までバスで移動するつもりで。部屋の移動に見通しがもちにくい子どもには、バスに乗る楽しい仕掛けが支えにもなります。目的地にはちゃんとバスストップもありますよ。



(3) 個人乗りの車も



みんなで乗るのも楽しいけれど、自分のペースでも走りたい!「ジブンノ」「ジブンデ」が育ってきている時期だからこそ、物の取り合いが多発することもしばしば。そんな時には個人乗りの箱車の登場。段ボールに乗りこんで引っ張ってもらうタイプ、段ボールを自分で持って走れるタイプ、紙袋の底を切り抜いて側面に装飾をしてマイカーを作ったこともありました。親子療育の時などに保護者さんにも手伝ってもらいながら、それぞれの好きな仕様で作ったマイカーは愛着も特別です。「個」を大事にしつつ、「いっしょだね」「たのしいね」とみんながつながるということをねらっていけるといいなと考えています。

いかがでしたか。これからも親子で「あー、楽しかった!また明日もやりたい!」「今日もうみのこに行くぞ!」と思える湖の子園にしていけるよう、子どもたちがキラリと光った瞬間を丁寧にキャッチして、楽しい遊びをつくっていきたいと思います。

「養護学校小学部での 数や平仮名の学習」



「養護学校の小学部ってどうやって平仮名の学習をするの?」「計算はいつからやり始めるの?」小学部低学年にいるとよく聞かれる質問です。みなさんご存知の通り、養護学校には決まった教科書はありません。その子ども、クラスに応じた学習内容をそれぞれの教師が考えます。私が担任しているクラスの子どもたちは発達年齢が2～3歳です。ひらがなを読むことができる児童もいますが、個別の指導計画や学習指導案に書かれている目標は「文字や数への興味を広げる」です。この段階の子どもたちの「国語・算数」での取り組みを紹介します!

①数の学習:「きんぎょ かくれんぼ」

「きんぎょがにげた」はいろいろな場所に隠れた金魚を探す絵本です。まずは読み聞かせの中で「金魚は、どこ?」というやり取りを繰り返します。その後は、作った金魚を教室に隠し、みんなで「金魚とかくれんぼ」です。この金魚は後ろにマグネットがついているので、見つけた金魚はホワイトボードに書いた金魚鉢に貼るように伝えました。「ここにもいた!」と大興奮で金魚を探す子どもたち。「いっぱいいっぱい見つけた」「一個だけしかない」と数を意識した言葉も聞こえます。約20匹の金魚が集まると、「いっぱい!」「すごい!たくさん」と声が上がりました。



その後は数字を見てその数量分の金魚をとってきたり、金魚のイラストと同じ数の金魚をとるなど、それぞれの段階に合わせた数の学習をしました。理解に差はありますが、みんなで数を数える楽しさ、「いっぱい」の嬉しさなどをたくさん味わえる学習でした。

②平仮名の学習 「おべんとう ぱする」



「おべんとうバス」はいろいろなおかずがバスに乗り、お弁当が完成していくお話です。「おにぎりさん」「はーい」の繰り返しがおもしろく、クラスの子どもたちは暗唱できるほどのお気に入りです。出てくるおかずの数がちょうどクラスの数と同じだったので、この絵本を題材に平仮名のマッチングの学習をしました。イラストと見本の文字を見て正しく平仮名を並べ替える学習です。ほとんどの児童がまだ読むことができないので、まずは文字の形の違いに気づいたり、みんなで読んで確認する中で一つの文字に一つの音があることを知れたらいいな、と思っていました。最初は「みかん」の3文字が並べ替えられなかった子どもが「えびふらい」の5文字を完成させることができるようになりました。一文字ずつじっくり形を見る姿が印象的でした。単語が完成するとおかずの絵カードにタッチして「やったー」と大喜びでした。

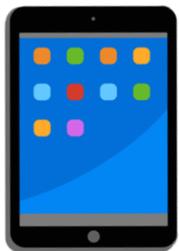
小学部での平仮名や数の学習について紹介しましたが、「文字や数への興味」はもちろんこの学習だけで広がるわけではありません。例えば朝の会で今日の日付を確認するとき、友達の名前をみんなで読むとき…。そんな時間にこそ「読んでみたい」「数えてみたい」と思うのではないのでしょうか。つい先日もクラスの子どもが「ハロウィンは3と1の日」と嬉しそうにカレンダーを見て指で3と1を作っていました。黒板に書いてある今日の日付とカレンダーを見比べて「もうすぐお菓子もらえるな」とわくわくです。平仮名や数がわかることがすべてではありませんが、わかることで生活の中で楽しいと思えること、面白いと感じることは増えると思います。「国語・算数」の学習では楽しい活動の中でそのお手伝いができたらな、と思います。



9月29日（土）、大津市の明日都浜大津に奈良教育大学の越野和之先生をお招きし、学習講座を開催しました。『もっと聞きたい！みんなの実践』をテーマに中学校の特別支援学級と特別支援学校の中学部から、それぞれ一本ずつ実践報告をしていただきました。以下、報告です。

特別支援学級での実践

自閉情緒学級に在籍しているAさんは、中学2年の男子生徒です。たくさんの本を読み、好きな分野の知識量だけでいえば大学入試を突破できるレベル。ただ、文字が上手く書けません。頑張っ書こうとすれば、しんどくなり吐き気を催してしまうほどだといいます。母親の提案で小学校のころからタイピングで文字を打つ機械を使い始めます。また中学校では、さらに難しい学習にも対応できるようにとiPadを使って授業を受けるようになります。はじめiPadの導入には、反対の声も多かったようですが、iPadを使うことで生き生きと学習に参加できているAさんの姿から周りの理解も広がっていったといいます。今では、支援学級に籍をおきながら、ほとんどの学習を通常学級で受けているとのこと。また、進学したい高校を見つけ、目標に向かって頑



張っているようです。しかし、書字に困難がある生徒が入学試験で合理的配慮を受けた事例はほとんどないとのこと。高校の学校説明会に出かけては、Aさん自身が自分の障害や中学校での合理的配慮について伝えているのですが、入試の際の配慮に関しては良い返事がもらえていないといいます。そのため、今は自立活動の時間を活用し、本児の自己理解を深めるとともに、自己発信する力をさらに高め、自分で合理的配慮を獲得していく力へとつなげていくと試みているようです。この「自分で合理的配慮を獲得していく」という視点にこの実践の深みを感じます。

参加者からは、一見、自分や自分の障害に対する理解ができているように見えるAさんだけでも、自己理解についてはもう少し丁寧に見ていく必要があるのではないかと意見が出されました。その意見を受け、共同研究者の越野先生からは、高校進学に向けてAさんが自分のねがいを発信し、周りを変えることができたならば、今後の自己理解がより一層深まると、実践の価値を再確認し、報告者の先生の背中を押しておられました。

支援学校での実践

支援学校からは『えがくつくる（図画工作）』の授業実践報告でした。報告者は5年目の先生。最初の2年間は小学部で実践され、絵を描くことが苦手だった児童が、周りの友だちに憧れ、また伝えたい思いが膨らむ中で絵を描くようになっていく姿が報告されました。所属が中学部になってからも、『えがくつくる』の実践は続きます。「〇か×か」の二分的な評価の中で「下手と思われたくない」という思いから、なかなか自分を表現できなかった中学部の生徒たちが、自由に表現できるようになっていく姿が報告されました。小学部でも中学部でも報告者の先生が一貫しておられたのは、“子どもたちに自由を”という思いでした。授業には見本も手順書も出てきません。子どもたちは、何にも縛られることなく、伸び伸びと自分を表現してきます。表現を楽しむ子どもたちは、黙々と作品と向き合っていたり、イメージが膨らみ言葉があふれだしていたり。見せる姿は様々ですが、皆、題材の魅力に取りつかれたように熱中している様子でした。図画工作の時間は他のことは考えず、ただ目の前のことに取り組む時間であってほしい。また、【良し悪し】、【正解不正解】だけでない「グレーの部分」を知ってほしい。このような実践者のねがいが授業に反映され、子どもたちが、それにこたえるように変わっていく姿がとても印象的でした。



最後に越野先生は、実践者の“子どもたちを自由にしたい”という一貫した思いに加えて、小学部では児童の生活に即した題材を、中学部では生徒のもつ“大人への憧れ”をくすぐる題材を、それぞれ用意しているところにも実践者のもつ感性の素晴らしさがあると説かれました。そして、このような実践から何を学び実践に返していくのかということフロア全体に投げかけられました。

報告された2つの実践には共通して、子どもたちの抱えるしんどさに気づき、そこから、いかに自由を獲得していけるかという視点を学びました。そして、それらが大人に強制される形ではなく、子どもたちが自ら獲得できるような“工夫”や“しかけ”がされていることに気が付きます。2つの実践報告から学んだことを、参加者一人ひとりがもち帰り、自分たちの現場でどのように実践に返していくか。報告していただいた先生方から大きな宿題をいただいたように感じます。

(長友志航)

感想アンケートより・・・★

他県の方の実践にふれることができ、たくさん学ぶことができました。

中学校からの報告はあまりきくことができないこともあり、とても興味深かったです。

実践をまんなかにおいて、みんなで話をする中で、そこからどんなことを学べるのか、どんな子どもの姿が見えるのかを一緒に考えていけるのが全障研の良さだと改めて思いました。

(20代：小学校支援学級担任)

実践から学ばせていただき、大変わかりやすくイメージしながら学べました。

日々の実践に生かすことのできる内容で、来て良かったと思う内容を学べました。

「その子にとって価値のある物」という視点で授業を仕組んでいく気持ちが高まりました。お互いにワクワクし学べたらいいな。明日からもまたがんばろうと思える機会となりました。

(30代：小学校教諭)

2つとも個性のある自由な発想に溢れていて、刺激を受けました。「個と集団」の中で子どもがどう力を伸ばし、パーソナリティを変容していくのか。その過程で求められる教員の観察力の重要性を再認識しました。

(40代：心理相談員)

2つの実践報告をお聞きし、とても勉強になりました。

今関わっているのは成人の方達ですが、学校時代にどのような関り、授業を受けてこられたのか興味があり参加しました。ひとりひとりにあわせた教育が、すべての子どもに受けられるよう願います。自由に表現できる、心のままに描いたり作ったりできる、子ども時代に子どもの感性で、取り組める時間が保障されているのはステキだなと思いました。ありがとうございました。

(50代：生活支援員)

他校種、他学年から学ぶことがたくさんありました。

他でされている実践発表を聞かせていただくことは活力と刺激になります。このような会に参加させていただきありがとうございました。機会があればまた参加させていただいて学びを深めていきたいと思えます。

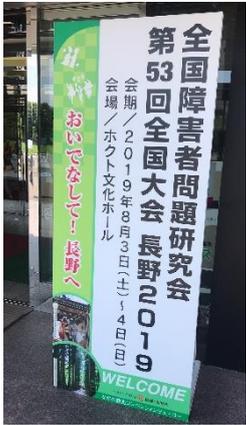
(30代：中学校教員)

第53回 全国大会in長野 2019

～守ろう平和・いのち・人権 学びあおう発達保障～

全障研長野大会1日目は、8月4日にホクト文化ホールにて行われました。

オープニングは、「親子でともに太鼓でつながる絆」と題した太鼓演奏。太鼓の音色はもちろんのこと、皆さんが本当に楽しそうな笑顔で、でも決めるところはばっちり決めながら叩く姿がとても素敵でした。文化行事「いつもと同じ道だけど～歌おう！踊ろう！みんなみんなが主人公」では、伊那養護学校中学部のみなさんや、長野盲学校卒業生の山浦未夢さんをはじめとするたくさんの方たちが、まさに「みんなみんなが主人公！」と自分らしく表現しておられました。一人ひとりが自分らしい表現をすることが、こんなにも一体感を生み、胸をうつのかと驚きました。そして、窪島誠一郎さんの記念講演、「無言館のこと」。本当に聞いて良かった、と思います。人が人として生まれてきて、それぞれが「生まれてきてよかった」と思えることが当たり前前に保障されるべきであり、その対極にあるのが戦争である。そのことを伝える柔らかくも軽快な語り口、ユーモア溢れる言葉選び。そしてその奥に込められた熱意。自分も含めて、全国から集まった、会場にいる一人ひとりの心が動いているのを感じました。



そんな風に静かに心を動かされたあとは、滋賀支部（滋賀にゆかりのある方なら誰でも！）で交流会を行い、長野の夜景を見ながら、みんなでわいわいと語りあいました。療育施設、保育園、養護学校、作業所などなど、30名近く集まり、それぞれの立場から熱い思いを語り合いました。もちろん良いことばかりではなく、“本当はこうしたいけどそうもいかない” “どうしたらよいのか困っている” といったような苦しい悩みも出てきていましたが、それをみんなで共有することによって、“しんどいけど、もうちょっと頑張ってみよう！” と元気をもらうことができたように思います。

（赤星香早）

各分科会より…

私は第4分科会「発達のおくれ」に共同研究者として参加しました。参加者19人と（長野の暑さに負けないくらい）子どもや実践への熱い思いを分かち合うことができた分科会でした。レポートは2つ、同じ療育現場からの報告でした。好きな遊びが見つかりにくく、「できた」という手応え（達成感）が見えにくい子どもに対して、どのように保育の中で好きな遊びをつくっていくかについて話し合いました。討論を通して、身体の育ちと心の育ちの繋がり、「これがしたい」とイメージが膨らんでいくことを支える友だちや集団の力、見立て（ごっこ）遊びの力の重要性について考えることができました。また、保育者自身がワクワクしながら実践することがやっぱり大事だよと確認しあう中で、明日からも楽しみながら頑張っていこうと元気をもらえる時間になりました！

（松島明日香）

「親・きょうだい・家族」の分科会に参加しました。家族だけでなく、成年後見にかかわるお仕事をされている方など、いろいろな立場の方が参加され、レポートは4本出されました。自分自身がきょうだいの立場なので、同じ立場の人たちに会えること自体とても貴重な経験でした。成年後見制度の現状や課題から、きょうだいへの素朴な思いまで様々な話し合いがされました。

「障害のある家族が異性の場合、外出先でのトイレ介助が大変」など、みんなの「家族あるある」から、まだまだ社会は障害のある人に優しくないんだな、と改めて振り返る場面もありました。

一言に「障害者の家族」と言っても、家族であることを苦しんでいる人、受け止め進んでいる人、様々です。障害者本人への支援と同様に家族への適切なサポートが求められていることを強く実感しました。

(仁村菜月子)



私は第3分科会「保育所・幼稚園における保育・療育」に参加しました。今回の開催地である長野県かざぐるま保育園と、我らが滋賀県大平保育園の実践レポートが発表されました。「やりたいけれどできない気持ちの葛藤」があって皆と一緒に活動することが難しいAくん、身体的な制約もあり意欲的にあそびに向かう姿が少なかったののちゃん。保育士の先生方が悩みながらも願いを持って保育していくことで確かに変わっていく二人の姿、そしてそれだけでなく、周りの子どもたちの変化が語られていることが印象的でした。午後のディスカッションでは、①障害のある子どもを含めて「ともに育ち合う保育」をどう進めていくのか②大人同士の関係づくり…という2本の柱を中心に、グループで話し合ったあとに全体での意見交流を行いました。それぞれの自治体によって制度的な違いはありながらも、“こんな風にしたい”という願いやそれができない苦しみなどは共通しているように感じました。

(赤星香早)



野洲養護学習会「ほっとーく」

8月19日(水)に野洲養護学校にて学習会を行いました。その名も「ほっとーく」です。集団で子どものことや授業のことを素朴に語り合い、ほっと一息つきながら元気になれる会にしたいと思い、学習会を企画しました。参加者は当初の予定を上回る17名でした。若手からベテランまで幅広い年代の先生方が集い、他校からも参加がありました。小学部高学年部の若手のK先生より、遊びの指導せいかつの「うどん屋さん」の実践を発表いただきました。ごっこ遊びが大好きな4~6年生の7名の子どもたち。子どもたちの生活経験を広げるために金銭の取り扱いを学ぶ機会にしたいと、うどん屋さんごっこをすることに…。授業の映像からは、子どもたちのドキドキワクワクしながら主体的に活動する姿がたくさん見られました。本物のお金を使用したこと、本物に近づけた毛糸のうどんやストローのネギ、大きな暖簾、うどんの券売機などの手作り教材、担任団で盛り上げたお店の雰囲気作りなど、素敵な実践のヒントをたくさん学ぶ場となりました。また、なかなか順番で怒ってしまう子への対応についても、いろいろな意見を出し合いながら、みんなで考えることができました。このような学びの場の大切さを改めて実感したことを、第2回、第3回と継続開催への力に変えて、日々頑張っていきたいです。(大師 観世)



Pontaのゆる～い日々 1



Pontaのゆる～い日々 2



母
姉いゆく、実物
より大分かわいい

Ponta
17才ダウン症の
男の子。嵐ファン



Pontaは、県内養護学校に通う17歳のダウン症の男の子です。三人きょうだいの末っ子。嵐が大好きで朝6時から歌って踊る生活です\(@o@)/

小さいころはすぐに熱を出して入院してばかりだったので、母は心配性ですが...

Pontaは「心配かけるな」と謎に偉そうに成長しました^_^;

これからPontaとのゆる～い日々を描いていきますのでどうぞよろしくお願いします。

・・・編集後記・・・

編集担当の仁村です(^ω^)今回のしがじん、いかがでしたでしょうか。「みんなの実践報告」や「4コマ漫画」など新しいコーナーが始まりました!ぜひご意見感想をお待ちしています^^ちなみに今回の表紙の写真は、近江八幡市にあるコスモス畑です!前回の茨城からは随分近場になりましたが、私のお気に入りスポットです(・v・)

さて、今回は事務局会議のお話です。月に2回の事務局会議。「仕事終わりに大津まで行くの、大変じゃないの?」とよく聞かれます。たしかにちょっとしんどいな～という時もあるのですが、がんばれてしまう理由は!!!!事務局のみんなが持ってきてくださるおやつです♡これを楽しみにがんばってるんだな～。写真はいつぞやのおやつ、とてもおいしいサクランボです(1人分ずつお皿に入っている女子力!)事務局のみなさん、これからもよろしくお祈りしまーす!^o^



おやつに感動しながらも、毎回とても楽しく会議しています◎お仕事の悩みを聞いてもらうこともあり、勉強になっています!気になる方はぜひ、人間発達研究所を覗いてみてくださいね(その際はぜひおいしいおやつを持って!)